

## 2000年天皇訪蘭にかんするメディア報道について ——「皇后さまと白い菊」——

中尾 知代

オランダには、第二次大戦時に蘭領東インド（現インドネシア）占領により、日本軍が連合軍捕虜とオランダ系民間人抑留者の犠牲者や死者を多くだしたことで日本に対して怒りと憎悪を抱き、また謝罪と要請を求めている団体「名誉の負債財団」（JES）がある。その怒りを2000年の天皇皇后慰霊訪問が和らげたという「説話」が日本で広がる傾向がある。これについては、拙著「戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー」でも書いたが、その後も同様の美談が朝日新聞の北野隆一記者によって広まっているので、あらためてその「説話」について整理しておきたい。本論は上皇后陛下を批判する意図はないが、彼女の「和歌」が各メディアを通して、日本側に友好感情が広がってしまっている以上、実際のオランダ側の感情とのずれが、いずれは国難を招きかねないので、あえて記すものではある。皇后陛下が歌を詠まないよりは詠んだ方が2000年の訪蘭の際の、抗議者たちの存在があらわになった事は評価できるのであるが（天皇の歌だけではわからなかっただろう）、しかし、明仁天皇の献花自体は一定程度の感情のやわらぎを招いたが、抗議者の人々はそれでは納得しなかったし、献花自体に日本で報道されるのとは異なる感情をオランダ側が持っていたことは繰り返し述べる必要がある。オランダの抗議者の群れが手に持っていた色とりどりの花が「白い菊」であったというフェイクニュースは画家・新聞記者・外交官の書かれたものを通して広がるばかりである。白い菊であるならば、いかにも哀しみ方が日本と共通しており、あたかも天皇の花にあわせて行進したような印象を与えるが、実際はどうであっただろうか。

### I. アムステルダムでのデモ

まず、最初の時は2000年、今から四半世紀も前のことである。1998年には英国で、元捕虜たちやサポーター、民間人抑留者らが御馬車の前で次々と背を向けるデモを行い、日本国旗をジャック・カプランが焼くという様子が、英国のメディアを席卷した。それから2年後の2000年には、「日本の保守や右翼を刺激しないために」、オランダの「名誉の負債財団」（JES）のリーダーと女王、日本の池田大使の間で交渉があり、抗議団体が、天皇皇后両陛下の戦没者慰霊碑への献花を邪魔しないように、デモと献花の間に2時間という間を置き、（特に日本の）メディアに抗議団体が映りこまなようにはかった。

当時、筆者は日蘭それぞれにオーラル・ヒストリー調査を行い、献花とデモの2時間のずれについては知悉していたが、朝日新聞や他のメディアは知らなかったのか、この2時間後のデモについては報道がなされておらず、特に朝日新聞の若手の北野隆一記者は、デモもない平穩の慰霊であった

ことを印象付けた。

### 名誉の負債財団の意味合いについて

名誉の負債財団とは、一般の日本人には意味のとりにくい言葉であろうが、日本という国は、本来は敗戦後になすべき謝罪と補償をしなかったため、一般の国と同じように扱われることはできないが、通常、国のように名誉をもって平等に扱う権利を、仮に貸し出してもらっているだけであり、日本側が通常、国のように扱われるためには、その「借り」を返さねばならない、という意味合いである。

2000年に明仁天皇と美智子皇后はオランダに国賓として招かれ、駅からダム広場までをパレードした。1971年に昭和天皇と香淳皇后がオランダを訪問したおりは、自動車にとびかかる元抑留者や、参加者から電気器具などが投げつけられたため、関係者は緊張し、2000年のパレードの周りにも銃を構えた兵士らが数メートルごとに立っており、行進を見守る観衆の番をしていた。

英国訪問の際は、銃をもった兵士は見当たらなかったため、銃を持つ兵士の隊列の様子は筆者には異様に思えた。

平成12年（2001年）美智子皇后はいくつかの歌を詠み、そのうち三首の歌が宮内庁のホームページに掲載されている。天皇の御歌は「若い時にあったオランダ皇太子にまた会えて嬉しい」というさりげないものだが、美智子皇后は、常に戦争の慰霊についてこだわって歌を残している。そのこだわり自体は歓迎すべきことであり、皇室の戦争責任問題ともかかわり、慰霊の巡礼の旅の記録としては評価できる。

しかし、彼女の歌が麗しいだけに、それがもたらす影響は大きい。デモが献花の2時間後であり、その間、天皇皇后はベアトリクス女王夫妻に護られて王宮（慰霊碑の正反対側にある）の中に入って宮中で過ごされたため、目にすることがなかった。

「オランダ訪問の折りに」と題された歌は次のようなものである。

慰霊碑は白夜に立てり君が花抗議者の花ともに置かれて

これには次のような宮内庁の説明がついている。

両陛下の慰霊碑へのご供花のあと、戦争被害者の一群が白い菊を一輪ずつもって行進を行い、その花を慰霊碑の柵のまわりに立てかけて帰った。両陛下はその夜遅くご宿舎にお帰り後、窓から見える慰霊碑の元に昼間陛下がお供えになった花輪と、さらにその

下段には、夕方になり柵の中に運び入れられた白菊も並べられて白夜の光の中に浮かんでいるさまを感慨深くご覧になったという。

英語版は次のとおりであり、これも宮内庁の解説に載っている。ここでは抗議者はwar-dead（戦死者）となっており、現状よりさらに遠いものになっている。

### On a journey in the Netherlands

The National Monument  
To the War-dead stands  
In summer's white night  
Where quietly lie the flowers,  
Both Yours and the protestors'

Note:

Following Their Majesties' laying of a floral wreath at the National Monument, a group of war victims came in procession, each bearing a single white chrysanthemum flower, and after placing them against the enclosure of the Monument, they went away. After Their Majesties had returned in the evening to the Royal Guesthouse, they viewed with deep emotion the Monument which could be seen from their window with the wreath His Majesty had placed during the day and, one step below, along with it, the chrysanthemums also that had been brought inside the enclosure in the afternoon, all now seeming as if afloat in the light of the summer's white night.

「戦争被害者」とは、日本軍に戦時中に抑留された人々を指す。また、慰霊碑とは昼間にダム広場に立つキリストが磔刑にあった像がついている戦争慰霊碑を指す。

この感動的な説明は、<戦争>の被害者が天皇がささげた白い菊の花輪に合わせて「白い菊を一輪ずつもって」行進したとある。いかにも天皇の心と抗議者らの心がハーモナイズしたかのような感動的な様相であるが実際はどうであっただろうか。

筆者は2時間後のデモまでダム広場で待機して元抑留者の行進を撮影したが、かれらが持っていたのは、白い菊の花などではなかった。ピンクの百合や赤い薔薇、スプレーカーネーションなど、色とりどりの花であった。白夜の中では色がわからなかったのであろうか、白い菊に合わせるつもりなどは抑留者には無かった。

抑留者らは、プラカードや垂れ幕を持つことは、事前交渉で行わないことになっていたため、行進の際には、「貴方たちの負債を返せ」と日本語で書いたベストをつけ、赤と白の反転した日の丸

に、やはり「貴方たちの負債を返せ」と描いてパウチした25センチ×40センチほどのカードを打ち振りながら、駅からダム広場まで行進した。

行進の際には3人の女性たちが葬送の行進の時に叩く黒い布をかけた太鼓（すりばち）を叩き、先導した。

### 花を捧げる目的と場所

花を捧げる場所も、熟考されたものだった。通常、オランダ領東インドの日本軍抑留者のサバイバーたちが献花するのは、ハーグにあるIndish Monumentと呼ばれる抑留者らの苦しみを彫像で表したところである。ここでは毎年8月15日に慰霊祭が行われ、各国の代表者が花輪を捧げ、抑留者の碑は花で埋もれる。8月に限らず、毎月、この慰霊碑に花が絶えることはない。ここに、海部首相が1991年に献花した際は、すぐに横の池に花は放り込まれた。次の年は、日本人神父が花を捧げたが、やはり花は池に放り込まれた。オランダの文化人類学者、フリーダス・スタイランは花を放り込んだ抑留者のオーラル・ヒストリーを試みている。それによって放り込んだ男性の抑留所時代の体験が、日本からの献花を拒否させていることを明らかにした。

今に至るも、日本の大使はインドネシアから引き揚げてきた人々のハーグでの式典と集まりからは正式に参加と献花を許されていない。「時期尚早」だと言われるのだと2024年3月にオランダを訪れた際に、在蘭日本特命全権大使は遺憾そうに述べた。今のところ、正式に献花はできないかわりに、8月15日の翌日に、日本からの献花を、抑留者の碑の前の、花が並ぶところに運び入れるのだという。8月15日の式典以後に、ここを訪れた人々は、日本からの花も見ることになる。いかにも他国と同様に献花が許されているかのように訪問する人々の目にはうつるだろう。どう思われるかは調査できないが、それが現在の状況である。

2000年に天皇皇后が花を捧げることを許されたのは、アムステルダムの「戦争全体」の慰霊碑であり、日蘭の間で問題になっている、抑留者や捕虜問題を代表するモニュメントではなかったのである。戦争全体の慰霊碑の前で花を捧げて礼をすることは「象徴的な行為」だとしてオランダ王立戦争博物館のエリック・ソーメルズは評価するが、それは「戦争の犠牲者全体」のための儀礼だから許されたのであって、蘭領東インド記念碑の前で献花する事は許されていないのである。

### 抗議者が花を捧げる目的

2000年に、抗議者と天皇の花が夜に、戦争犠牲者記念碑の前に並んでおかれていたのは事実だが、花を捧げる目的も、抗議者たちと天皇皇后とは異なっていた。昼間に天皇が花を捧げ、二人が深々と慰霊碑にお辞儀をした際は、軍楽隊が讃美歌を演奏し、あたりは礼拝のような雰囲気に包まれた。それだけ注目されていたのは確かである。プレス、つまり報道担当として登録して参加すれば、他の参加者と同じように、天皇皇后が献花するところがよくみえる場所のひな壇に案内され、

そこから天皇皇后を写すように配慮された。私は一般人の枠で入ったため、遠くからビルの柵によじのぼって撮影するはめになった（その分、デモ隊を待つことは楽になった）。

皇后さまの御歌では、天皇が捧げた花と抗議者の花が並んで置かれており、あたかも敵対する人々が、恩讐のかなたに寄り添ったような印象を与える。「抗議者」と明記することで、皇后は天皇の献花に反対する人々がいたことを明らかにしている点は評価されよう。宮内庁の説明のように「戦争の犠牲者」という、曖昧な表現は使っていない。「戦争の犠牲者」ならば、原爆や空襲の犠牲者、ナチスに囚われた人たち、漠然とした戦争の犠牲者たち全体を指す。しかし、このデモの抗議者たちは、オランダ領東インドに、かれらから見れば「侵略」した日本軍と日本人が、各地の抑留所に強制的に入れられ、あるいはタイメン鉄道やスマトラ鉄道などの軍事的策略の場所に労働力として送り込まれた人々なのである。

宮内庁の説明では「白い菊を一輪ずつ持って行進し」とあり、あたかも天皇のささげた白菊の花輪と共存するかのように表現されているが、元抑留者らが花（薔薇や百合やカーネーション）を手にもって行進した理由は、宮内庁の説明とは真逆であった。

名誉の負債財団のバウマン代表は、正統派カルバン派の流れをくむオランダの影響力の強い新聞に対して次のように目論みを話していた。「(戦後) 55年後の今も私はこれをやらなければなりません」

「私たちの花を供えることで、天皇の花輪が記念碑につけた汚れを取り除きたいのです」と、日本名誉の負債財団のB・バウマン会長は言う。「私たちは意図的に天皇よりも遅く行きます。彼の花輪も戦争犠牲者のためのものであり、そのような式典にふさわしいデモンストレーションはありません。」

"Everything is coming up now," says E. Bloem, camp victim, as he walks under the screaming billboards of the Damrak. "I still have to deal with it, after 55 years."

Some would have preferred to demonstrate just after the emperor's wreath-laying. "But now we might be able to take away his wreath, there are only two men," he says conspiratorially. In 1991, the wreath that the then Japanese Prime Minister Kaifu had placed near the Indian monument in The Hague was thrown into the water and there was a riot in Japan.

天皇が花輪を捧げた直後にデモをすることを好む人もいただろう。E. ブロームは言う「でも、今なら天皇の花輪を奪うことができるかもしれない。(供花を護衛する) 人間は二人しかいないんだ」と彼は目論見を話す。1991年に海部首相がハーグの蘭領東イン

下の記念碑に献花したものは水に投げ込まれ、日本で暴動が起きた。

(Trouw紙 2000年5月24日)

だが献花は二人の衛兵で護られていただけでなく、鉄柵が数メートル離れたところに設けられていた。デモンストレーターや献花をよく思わない人たちに花が奪われないためである。

ダム広場に到着すると、失望が待っていた。インドネシア系オランダ時人らは記念碑に到達することができず、大きな鉄柵に囲まれているのだ。「これは象徴的だ。一度（抑留所で）鉄柵に囲まれたら、常に鉄柵のうしろにいるというわけだ。」バウマン会長は、柵の外に置かれている花を記念碑に置くために、数人の友好的な係員をすぐに手配した。（Trouw紙、同）

天皇皇后が捧げた白い菊の花輪は、抗議者の花と共に置かれたのは結果であって、もともとは自分たちの持って行った花で、天皇の花輪を「染み・汚れ」ととらえ、それを覆い隠すというのが目的だったのである。

しかし、美智子皇后と宮内庁が付記した感動的な「白い菊」のエピソードは、数々の本やメディアを経て広がっていった。

天皇が譲位し、今上天皇に変わる際にも、皇室外交は報道されたが、背中を向ける映像などが流れる事はなかった。皇室外交をまとめた北野隆一編集委員の記述にも、また「白い花」が繰り返される。「平成と天皇 中 第8部外国訪問」では、「鉄柵の外 抗議の抑留被害者」のタイトルのもとで、「花輪の周りには鉄柵が立てられ、夜を徹して警備がついた」とあるが、「抑留被害者らが白い花を一輪ずつ持って抗議に訪れたが近づけず、鉄柵の周りに花を手向けた」とある。北野記者には、デモを行っている抑留者らのライブ映像を、当時調査した私が動画で北野記者に色とりどりの花を持つ抑留者の見せた後であったが、やはり「白い花」と書かれている。

私は「なぜ白い花と書くのか」と問い合わせを送った。北野記者からきた返事には、宮内庁の説明、池田維元駐蘭日本オランダ大使の説明、および安野光雅の「皇后美智子さまのうた」の該当ページ数が記されて証拠として返されてきた。安野光雅の「皇后美智子さまのうた」（朝日新聞出版、2014年）の60頁に、「慰霊碑は白夜に立てり君が花抗議者の花ともに置かれて」が引用され、そのあとに安野氏の解説がついている。これもほとんど宮内庁の説明が元になっていると思われる。

「両陛下がオランダで慰霊碑にご供花されたあと、さる戦争の折の抗議者、戦争被害者が白い菊を一輪ずつもって行進し、慰霊碑の柵の周りに立てかけて帰った。花が次第に増えると、柵の中に立っていた2人の衛兵が外に出てきてそれらを集め、両陛下の供えられた花輪の下段に並べた。わ

たしはあの白夜に浮かぶ献花を覗かれている両陛下の胸中を拝察して胸が熱くなる。これより前に昭和天皇が訪問されたときは、さる戦争の折に日本軍の捕虜となり恨みを持った人からは歓迎されなかった。」

安野はその後、ライデン大学で三人の女学生が偶然天皇皇后と窓越しの話したおりのことを「歓声をあげて歓迎した」と大仰に描き、歓迎の様相を描く。「天皇陛下コーヒーはいかがですか」という垂れ幕があったのは事実だが、「歓声をあげて」は行き過ぎである。安野光雅のいう「さる戦争」「戦争犠牲者」はオランダ領東インドを日本が占領してオランダ人を抑留した際のことを指すが「さる戦争」とぼかすのはなぜなのだろうか。池田元大使は著書『激動のアジア外交とともに— 外交官の証言』で「両陛下が慰霊碑に供花をされ献花式が終了した後、オランダ人戦争被害者のデモの一群が白い菊を一輪ずつ持って行進しそれらの花を柵の周りに立てかけて帰りました。」と記している。(中央公論新社、2016年)

結局、朝日新聞のメディア報道では、あくまでも「白い菊」「白い花」に固執し、オランダ側の「戦争の献花でついた染みをカバーする」という目論見は全く報道されなかった。

どうしても日本側の情緒として、日本に抑留されて被害を受けた人々の怨念や悲しみ、恨み、怒りと憎悪よりも「共感する哀しみ」に話を置き換えて作話する傾向が絶えない。

私はその場において録音・録画し、オランダの新聞に載る彼らの本音も記録するが、歴史中にはどちらの表象が力をもって残るだろうか。私は著書の中にも「白い菊」を一輪ずつもっていったのではない事実を書いたが、朝日新聞・外交官の証言・そして安野光雅の広める「白い菊の花」を「戦争被害者」が持って行ったという「美しいエピソード」の方が参照される可能性が高いであろう。

デモの現場にいたならば、オランダメディアが集中した、行進の列の中から持ってきた花を捧げたインドネシア系オランダ人の女性が、沈黙の行進に耐えられずに泣き叫んだ声の方が耳に入っただろう。ここに再録しておくことにする。(オランダ人に書き起こしと英語翻訳を依頼し、オランダ語に堪能な日本人に再チェックを依頼した訳)。

かくして、色とりどりの花のことも、その目的(天皇の花がつけた染みを覆い隠す)も、日本においては、宮内庁・画家・外交官・新聞記者の歪曲により、現実とは遠く切り離れたエピソードとして伝わったのである。

ちなみに、私はその実相を描いた内容を本に記し(「トラウマ記憶のオーラルヒストリー— 連合軍捕虜とその家族」評論社)上皇后さまに謹呈し、皇后さまもその本を手元に置かれたという連絡がきたが、ご多忙あるいは健康の問題で読まれていないかは不明だが、本をお渡ししてから2年経つ今も、宮内庁の説明のホームページの文章は変わらないままである。この泣き叫んだ女性のオランダ語と英語訳と日本語訳を載せておく。インドネシアなまりでもあり、オランダ語でも書き起こしは難しかった。

0.18 - 0.20... blote voeten ...

2000年天皇訪蘭にかんするメディア報道について  
——「皇后さまと白い菊」—— 中尾 知代

0.18 - 0.20 '... bare feet...'

はだして…

0.21 0.28 - Ik kan het niet volgen. ik kan niet leven, van niets meer, van alles in oorlog in Japanse tijd

0.21 - 0.28- I can't follow it. I cannot live on, on nothing more. About everything at war in Japanese period

私はついていけない、私はこれ以上、生きて、生きていけない。日本との戦争のことみんな

0.29 - 034 Daarom voel ik pijn, pijn! Mijn vader moet levend terug

0.29 - 034 That's why I feel pain, pain! My father has to go back alive!

だから痛い、痛いの。お父さんに生きて帰ってきてもらいたい

0.34 - 0.38 Ik wil mijn vader terug, levend

0.34- 0.38 I want my father back, alive

お父さんに帰ってきてほしい、生きて

0.39 - 0.46. ik heb (geen) vader vanaf 9 jaar af.

Iedereen loopt met vader. Ik zonder mijn vader!

0.39 - 0.46. .... my father.

Everyone walks with father. Me without my father

みんなお父さんと歩く、私にはお父さんいない。

0.47 - 0.56 Ik leef alleen met mijn moeder. Maar Nederland geen pensioen (? indonesische term pensioen no sotoe?) . Ze hebben helemaal niks gedaan

0.47 - 0.56 I live alone with my mother. But the Netherlands ...?..."no pension?.

(indonesion term Pension no sotoe)

They have done nothing at all

私はお母さんしかいない。でもオランダ。。。恩給、何もしてくれない

0.57 1.00 en mijn vader ook niet terug komen

0.57 1.00 and my father will not come back either

1.01-1.05 Ik heb hartzeer, hartzeer, erg hartzeer

1.01 - 1.05 I feel pain in my heart, pain in my hart, very much pain in my heart

私は心が痛い、心が痛い。本当に心が痛い。

1.06 - 1.14 (huilen)

1.06 - 1.14 (crying)

1.11 - 1.15 Ik haat ze, haat ze

1.11 - 1.15 I hate them, hate them

あいつらが憎い、憎い。

1.16. andere vrouw: 'Kalm aan'

1.16. other woman: 'Calm down'

(別の女性) 落ち着いて

1.19-1.20 Ik erg haten, haten!

1.19 - 1.20 I very hate, hate!

私は本当に憎い、憎い!

1.24 Ik heb pijn ,haten . haten. Voor wat? Voor Wat?

1.24 I hurt, hate. hate. For what? For what?

胸が痛い、憎い、憎い。何のために?なんのせいで?

1.31 - 1.38 Ik ben invalide geworden van toen in de oorlog. Ik ben ...?... niks.

1.31 - 1.38 I became disabled (or: invalid) from when in the war. I am ...?... nothing.

私は身体障害者になった。戦争の時のことで私は…何も…

1.40 een omstander: 'rustig'

1.40 a bystander: 'calm'

横にいる人「静まって」

## 天皇の言葉

その後、テレビでも明仁天皇の晩餐会のスピーチが報道され、天皇は以下のように述べた。

「両国が、先の大戦において戦火を交えることとなったことは、誠に悲しむべきことでありました。この戦争によって、さまざまな形で多くの犠牲者が生じ、今なお戦争の傷を負い続けている人々のあることに深い心の痛みを覚えます。二度とこのようなことが繰り返されないよう、皆で平和への努力を続けていかねばならないと思います」

このあと、天皇は両国の友好関係に努力を尽くした人に感謝の意と忘れないという決意を述べた。

未来志向でいこうという、おさだまりの日本の姿勢を示すといえないこともない。

このお詫びの文章を書いたのは原田武夫だと本人が述べているが、謝罪と負債を払うことを願う人々にとっては（賠償金を願う人々にとっては）この言葉は十分ではなかつたろう。私が翌日

ハーグで会った、白い服を着た、抑留所から「慰安婦」として連れ去られて性の蹂躪を受けたティネケは、その言葉を言ってもらって嬉しかったと、今もしわだらけながら美しい笑顔を向けた。

(だが抗議デモには参加していた) この言葉に満足した人もいれば、至らないと思った人々もいるのである。その人々は今も、これを書いている2024年も、毎月30分ほどのデモをハーグの日本大使館の前で行っている。

## II. ハーグのデモ

池田維元大使は、自著で各地方では小規模なデモしかなかったと述べているが、ハーグではそれなりの大きなデモがあった。もともと、池田大使は各地を回ってそこの自治体でメディアに写らない距離を測る鉄柵の位置なども確認して回ったと、私のインタビューでは述べていた。ハーグでは広間にまずデモンストレーターたちが集まり、旗とプラカードを持って町を巡った。一人の男性は「No Pearlharbor No Hiroshima」とかいた旗をもっており、「なんだい、君たちが戦争を始めたんじゃないか、原爆は僕を救ってくれたんだ、リトルボーイ（広島原爆）とファットマン（長崎原爆）がね」と述べていた。もう少し戦争が長引いていれば飢餓か過労で死んだかもしれなかった少年だった彼の心の底からの思いなのであろう。

前を行く女性は、白い日本国旗の真ん中の赤をどくろにして、血を流している絵に書き換えて、彼女の息子とともに旗を掲げていた。彼女のTシャツには、そこから垂れた血の一滴が描かれている。旗には「戦犯をあがめるのをやめよ、ソネケンイチ」と英語で書かれていた。曾根憲一はオランダ領だった東インドに作られた日本のチデン女性抑留所の所長であったことで有名で、食糧交換を現地人と行う女性たちを罰するのに、20名の女性をよびだし、互いに向き合わせて、お互いの髪の毛を坊主頭に刈り取らせるなど、厳格および残酷な罰で知られていた。「戦場のメリークリスマス」のヨノイのモデルではないかと思われる男性である。

天皇皇后がハーグの首相府「ビネンホフ」でウィム・コック首相主催の昼食会に出る際に、その外の植え込みの横の広場にデモ隊は到着したが、メディアが入れる場所に来ると、旗を降ろさせられた。女性は抗議したが、団体のトップはオランダ政府（ないしは女王）と、メディアに反日的なメッセージを載せないことを約束していたので、女性の旗を降ろすように説得した。その時の英語訳が以下のものである。

抗議団体の一員であるらしい退役軍人に。横に武装した警官と機動隊員がいる。彼らが無線機でやりとりしている声が聞こえる。

(021) Veteran: 'there has been made agreements with the authorities concerning the ceremony. Such as how many people are allowed to join' ..

退役軍人「司令部で、儀礼にかんする取り決めがあったんだよ。何人参加してよいかとかね。」

The guy you interviewed later in this scene says: (0.30) ‘ It is strange that you can’t express you opinion on a square, which is a public space. That’s really exceptional’  
(0.30)

息子（私のがちにインタビューした男性）「公の場所で意見を述べられないなんておかしいよ。こんなことは例外的だ」 0.37 Thew woman: ‘I have made a phone call, but no one was attainable’ . 女性「私は（たぶんJESの）上層部に電話をかけたのよ。でも誰も出なかったわ。  
The quy makes the conversation unintelligible. He repeats his previous statemant  
男性は前に言った言葉をくりかえしているらしい。

0.47 Woman: ‘My mother has been abused (by this people) , I feel pain. Do you understand, or not?’

「私の母は虐待されたのよ。私は心が痛い。あなたわかってるのわかってないの？」

0.50, The veteran: ‘Yes you have ervery right, but it is not allowed to show this banner on the square 退役軍人「確かに君には（主張する）権利は完全にあるよ、だがこの広場では旗をみせることは許されていないんだ」

0.52. Woman: ‘Why not?’

「なぜだめなの？」

0.54 Veteran: ‘Beacause it is not allowed’

「許可されてないんだよ」

0.57 Woman ‘ Then you turn around’

「じゃあ後ろをむいていけばいいじゃないの」（見ないふりをすればいいじゃないの）

0.58 - 1.07 veteran: ‘ No.no the police won’t turn around. And I feel very miserable for you, if you should come into contact with the police. And the police will use violence”

「いやいや、警官は後ろをむいてくれないよ。もし君が警察につかまるようなことがあれば、僕はみじめな思いをするだろう。それに警官は規制力も使うよ」

このあと、結局女性は旗を降ろすが、息子は「憲法が敬意をもって扱われていない」と苦情を言い続けた。オランダでは憲法で保証されている自由が、日本の天皇と皇后を傷つけないために、ねじまげられたのである。この点については、エリック・ソーメルズによると、天皇皇后が帰国してからしばらくオランダで話題になったということであった。結局、メディアが写せるところでは、天皇皇后の車が通るときに、人々は伸びあがって、「あなたの名誉の負債を払え」のパウチしたカードを打ち振ってプーイングをしたが、自動車にのった天皇皇后には全く見えなかったことだろう。

デモは小規模であっただけではない。参加人数、横断幕をメディアや天皇皇后にみせないことを警察や機動隊まで呼び出して管理したために、日本に彼女たちの声や嘆きや怒りは届かなかったのである。

そして、悲しみの一致することを象徴するような「白い菊」「白い花」の美談のイメージだけが日本側に残り、女王と天皇の間の外交の成功として喧伝された。

日本でも他の元外交官に会ったことがあるが、「オランダとの抑留者問題は明仁天皇が幕引きをした」と述べていた。

2024年の3月の段階でオランダを訪れたが、今も第二火曜日のデモは静かに続けられている。以前は、そのうちの数名を大使館に招き入れてお茶をのみディスカッションをするなどしていたが、毎月彼らが日本の首相に出している陳情書が、日本の首相に届いているかどうかについて疑問が提示され、陳情書が首相に届いていることを確認するまでは、お茶の時間ももたないことに変更された。

1998年の英国のデモが英国メディアであまりにも報道されたため、オランダでは規制をはっきりさせ、反日のイメージを作らないようにしたが、天皇と皇后の馬車も2メートル間隔の銃をかまえた兵隊に護られ、またデモを警察や機動隊で抑え込んだうえで、「静かなデモ」だったことを、池田維大使や朝日新聞の北野隆一編集員は、謝費や公費で動いているのだから、もっと報道する責任があるのではないだろうか。

わずかな公費と私費で、これだけの情報を集めても、読まれることは少ないだろう。

日本メディア・皇室メディアに抑圧されたこれらの声が、時とともに高齢者の間で静かになっていくにしても、それは地層にしみ込んでいくのではないだろうかと思われる。地層にしみ込んだものは、表土にあるものよりも取り除くのが難しいのは当然のことである。

なお、上皇に譲位される際に、朝日新聞や各誌も、皇室外交の写真を出したが、デモの写真は、駅前でデモを待っている集団の写真の小さいものが一枚あるだけで、英国のデモに至っては全くなかった。

今年、徳仁天皇が雅子皇后と訪英するときになって初めて、英国で1998年にあった背中を向けるデモのことが報道されていたが、（近衛兵が背中を向けたという誤情報を池田維元氏が書いている）これらの映像は、今回、デモが無いという条件との比較で出されたものであった。元捕虜たちはすでに100歳にならんとしている。デモをするのは難しいだろう。また、日英の政府ともに、直前まで徳仁・雅子皇后がいつ訪英するかを明らかにしなかった。デモの準備などができるのを避けたのではないかといううがった見方もできる。6月下旬だと読売新聞が報道しただけで、宮内庁が激怒したという話もあったほど、いつ行くのかが直前まで明らかにされなかったのである。

報道やツイートをみただけでは、1998年の報道がほとんどなかったためか、2024年の国賓の儀礼に沿って行われるプロトコールの様子を、あたかも英国が日本を特別扱いしているような誤情報が

周り「こんな風に英国に歓迎されるのは天皇を頂く日本だけだ」、というツイートに2万もの「イイね」がついてしまっていた。宮殿までの旗を半分日本国旗にするのは、他の国の国賓でも同様である。日本のヨーロッパコンプレックスはいまだ強く、メディアは元抑留者問題や捕虜問題を、いまだに正面からとらえることができないという遺憾の念をもって本稿を終えることにする。（捕虜の補償問題が国内で支払われたためデモがなかった点はあるが、怒りが消えたわけではない。）現在、日英イタリアでステルス戦闘機を共同開発するなど、英国の軍隊との共同戦線が、中国やロシア・イスラエルとガザの問題を前に軍事同盟を組む前の軍事的友好の結び直しに映るのは私だけだろうか。

果たして、この小論を目にした人々は、宮内庁の説明を書きなおす勇気があるだろうか。それとも「天皇皇后にはそうみえたのだから」と押し通し、長い歴史にはこの麗しい物語のほうが固定するのだろうか。

これを読んで、日蘭や日英の関係を正確に見直そうとする人がいればよいのだがと心から願う。



デモを歩くオランダ人元抑留者の人々



デモの途中で、献花の前で「父を返せ」と叫ぶ元オランダ人抑留者の女性



戦没者慰霊碑の天皇の献花を囲む柵の外に色とりどりの花を掛けるオランダ人元抑留者ら



ハーグのデモ、天皇皇后の車が通る場所で旗を降ろすように説得する代表と反発する女性



ハーグのデモで、天皇后やメディアから見える場所で旗を降ろさせないよう訴える元抑留者